読書

県図書館に行こう!

こんな情報が待っている!

一九三一（昭和六）年に東京で全国道府県立図書館長会議が開かれ、その場で中央図書館長協議会が設立されたが、この時に岐阜県にはまだ県立図書館がなかった。

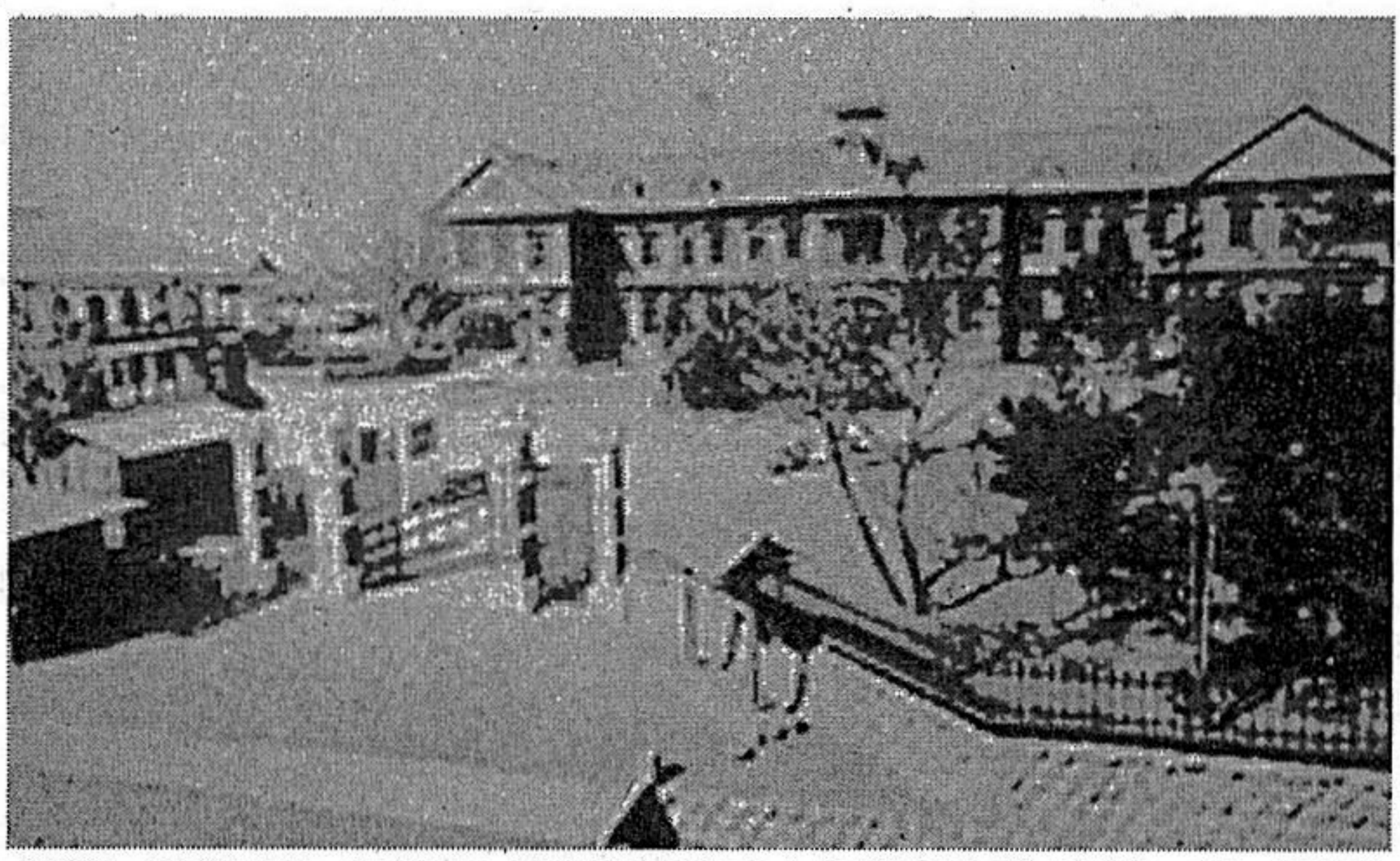
これをきっかけに県内では中央図書館の役割を担う県立図書館の建設を求める動きが大いに高まった。しかし県の財政事情はきびしく、三四年、県教育会附属図書館が県に移管され、それが核となることによってようやく、県立図書館が誕生することとなった。

当初、「県立岐阜図書館」は旧教育会附属図書館を臨時館舎としたが、三七年、岐阜市司町にあった県物産館を改装してそこを新しい館舎とした。新館舎の開館式は文部大臣や帝国図書館長らも列席する盛大なものだった。

県立岐阜図書館は、国から中央図書館の指定を受けるため、蔵書目録の作成や郷土資料の収集など必要要件の達成に努めた。教育会附属図書館時代に収集した郷土資料に加え、この県立岐阜図書館時代に収集した新たな資料群は、現在も岐阜県の近現代史研究の貴重な宝となっている。

県立岐阜図書館の蔵書は太平洋戦争末期の四五年七月、岐阜空襲で大半が焼失したが、郷土資料は郊外の寺院などに疎開してあったため戦災をまぬがれた。県立岐阜図書館が作成した「図書目録」の「郷土資料」の項を見ると、今ある一冊一冊の尊さがじわじわと伝わってくる。

県立岐阜図書館　収集資料 郷土研究の宝



1902（明治35）年刊の「岐阜県案内」に載る県物産館。37（昭和12）年に改装され、県立岐阜図書館の新館舎となった

戦時中の四二年、県内外の公共図書館や私設文庫、県内の役所、学校、神社、仏閣、個人などが所蔵する県関係郷土資料の総合目録として「濃飛郷土志料目録」が、県立図書館内に事務局を置く「岐阜県郷土文化史調査会」によって刊行された。図書のほか古文書も掲載されており、郷土研究の参考資料として今も貴重な存在となっている。

BOOK REVIEW